

## 井上円了の唯物論批判 (三)

針 生 清 人

哲学は中道、中庸であるべきであり、極端に一方に偏してはならぬというのが円了の基本的な姿勢である。このことからすると、唯物論を批判する

円了の主張も一方に偏しているといわざるを得ない。しかし円了が「唯物論の絶対的反对者」を自称して唯物論を批判するのは、唯物論者が実験の範囲内に止まることなく、越境して道徳、宗教にまで手をのばすからだという。そうでないならば、反対する理由はない、といっている。しかし唯物論者は、「物質の外に神もなく心もなく、宗教は排すべし、道徳は自利のみ、経験を離れて知識もなく思想もなく、先天性は空想なり虚無なり」<sup>(1)</sup>として、他の領域にまで手をのばして「世道人心」を惑わしている。このことについていえば、民衆教化の実践に勉めて全国巡講を続けている円了にとって「俗論」以外の何ものでもなく、通俗的な批判論を民衆の前で展開する必要があった。しかし、それ以上に、物質や経験知のみを認め、神も心も先天性も否定する唯物論が俗論の根底にあるとすると、唯物論を理論的にも批判する必要があったのである。

そもそも、井上円了の哲学観は「哲学の中道」を強調した『哲学一夕話』や『哲学要領後編』<sup>(2)</sup>において既に見られるように、唯物論を論究して行けば唯心論に至たり、唯心論を論じ尽くせば唯物論に至るといえることが根底にある。

円了によると、唯物論者のいう「物質」とは「五官」(眼、耳、鼻、舌、身)の感覚の示めす「現象」であり、物質の性質は「五境」(色、声、香味、触)から成るといわれる。物質から五境を除去するならば、物質そのものは「たちまち滅無に帰する」<sup>(3)</sup>にちがいないのである。ところで、五境は五官の感覚に属するものであり、物質そのものは感覚より生ずるといわざるを得ない。これは、唯物論が一変して感覚論となり、さらに一変すれば唯心論になるということを示めすものだというのである。つまり、感覚論は外界の万象が感覚の性質、度量のいかんによって変現し、人間にあっては感覚の異なりに応じて外界の現象を異にするというものである。感官によって認められる外界は、人間と動物にあっては全く異なる。いうならば、人間が外界と認めるものと、動物が認める外界とは異なるといわざるを得ない。従って、外界万物は感覚より現れている、といえる。それ故、円了は

感覺論が一時勢力を得るに至つたのだといふのである。

従つて、感覺を離れては外界の事情を知り得ぬと同時に、内奥の知識、思想も感覺を離れては存し得ない、と円了はいふ。このことから、感覺の外に物質の實在はなく、同様に感覺を離れては精神の本体も物も心も存しないというような懷疑論、虚無論となるもので、円了は「唯感論」と呼んでよいといふところである。

これに対して円了は、感覺論は一種の唯心論だといふ。感覺するとは、全て意識によつて認められるので意識は精神の特性であり、感覺は意識の一部である、従つて感覺論は唯心論に属する、といふのである。しかし感覺論者は経験論者と同じく、「知識思想および論理の原則、真理の標準」の全てが「感覺上の習慣あるいは連想より生じたものだ」と主張するところである。このことは、東洋の哲学を再建する上での障害となるので批判せねばならぬ、と円了はいふのである。

先ず第一に、経験論者は生まれたときの人間の心内には「なんらの影も形もなく」「白紙のごときもの」であり、「感覺上の経験よりようやく知識を生ずる」のであると主張するが、もし人が生まれたときの「心は果たして純然たる白紙」のごときものであるならば、「感覺より入りきたりたる外物の影像を写し出すこともとどめおくもできぬ道理」である。影像が心面に現れる点から考えれば、「白紙」のごときものではなく、「明鏡のごときもの」でなければならぬし、しかもその影像が単に現れるだけでなく、その中にとどまる点から考えれば「明鏡」でなく、「写真に用うるガラス板のごとく薬品の塗り付けてあるもの」と考えなければならぬ。そのように考えると、精神の方に外物の影像をとどめ置く力は、「先天的に備え

て」とあると考えざるを得ぬが、この力までも経験より来たといふ道理はないのである。また、感覺が外界の一物を感じるとき、五官が「各性質を別々に感ずる」のだから「わが心にて一物として認むるには、その諸感を結び付ける作用」<sup>(4)</sup>が必要であるが、これも経験に由来するものでなく、「必ずわが心に生まれながら備わ」つたものといわざるを得ない、とカントを思わせる議論を展開している。

経験論がいう一物の影像あるいは觀念が所謂知識となるには、適宜に結合し整理されなければならぬが、この「整列結合の作用」は経験に由来するものでなく、「精神」内に「生まれながら具存」していると考えざるを得ぬといふ。例えば、一軒の家を建てるには無数の材料を必要とするが、それを集めただけでは家は建てられない。必ずそれらの材料を適當の位置に配列し、構造する作用を加える必要がある。材料は感覺より得られるが、これを構成する力は本来的に固有するものでなければならぬ。感覺によつて集められた材料だけでは知識は成立せず、それらを組み立てる作用が内から働かねばならぬのである。「すべて我人が感覺が経験より得るところのものは、知識思想の材料だけにて、これを結合構成する力はみなわが心に固有せる先天的能力なるに相違」ないのだといわれるところである。

感覺論者、懷疑論者は、我々の思想はすべて「習慣連想の作用」によるというが誤りであると円了はいふのである。習慣とは経験の反復によつて成るものであり、連想は感覺または觀念が他の觀念と連合することであるが、これらの作用は感覺上の経験によるものではない。先ず、連合作用そのものは「心内の作用」であり、反復する経験が習慣性をなすのも心内に存する力に依るからである。また、感覺論者は、我々の「連想作用」によつ

て個々の観念を連合し、それを「抽象概括」して目前に「現見せたる思想を得るに至る」というが、この「抽象概括」も精神に固有の作用ではないのか。記憶や観念を分解、総合、比較、彙類するのも経験の結果ではなく、先天的精神作用だと、円了はいうのである。

また、感覺論者、経験論者は、無形の思想を有形により想像し、抽象し、引き延ばした結果にすぎぬというが、それらはみな感覚上の経験より入ったものではなく、もとより先天的作用なのである。想像作用において経験した事物の影像を種々取捨伸縮し、かつて見聞したことのないものを想い出すという場合も、その取捨伸縮する作用も内より加えたものであつて、先天的無限性の刺激が内から加つたものである。それ故、抽象概括によつて絶対無限の思想を生ずる作用も同様に先天的である。

例えば、 $\infty + \infty = \infty$  という数式において、2、3、5の三数は経験上外界から得たものであるが、二数2、3を加えた数が5の数に等しいと認める作用は、心内より与えられるものである。また、「甲 $\times$ 無限 $\parallel$ 無限」においてその等しさを認めることは心内の作用である上に、無限そのものも経験によつて獲得したものではないので、同様に先天性に帰さなければならぬ。要するに、感覺論者、経験論者は、知識思想が全て経験に由来すると称するが、それは先天的精神作用がその中に加わるということを知らぬことにある。

## 二

感覺論の結果は、論理思想の原則、真理道德の標準を排して懷疑論に陥つたと見える。諸原則の内、因果の規則の起る所以を述べる必要があると円

了はいう。

感覺論者は「因果の規則は経験反復の結果」だというが、感覚上の経験は個々の事物を別々に感じ、しかも有形の現象のみを感じるのだから、因となるべきものを感じると、果となるべきものを感じるのでは相違があるにちがいないと円了はいう。すなわち、因果の関係を発見し、その前後の二項を連合するのも、前者が後者の因、後者が前者の果であることを定めるのも感覚以外の作用であるというのである。二者の間の関係と連合は「無形」に属し、感覚そのものの認めるものではないので精神に固有の先天性といわねばならぬというのである。

また、感覺論者は経験の反復によつて、その間に「因果必然の関係」が存することを知るといふが、その必然の関係を発見し知定する作用は感覺そのものに由るものではないのである。因果の規則は一貫して必然であるが、感覺より得るものは「万殊にして不必然」である。従つて、その一貫性は万殊の結果ではないし、必然も不必然の結果ではないのである。つまり、因果律は経験の範囲外にも及び、経験を先導し、知識思想の根本となるものであつて、感覺論者がいふように「経験積聚の結果」ではないのである。

経験が因果律を根拠として成立することは、経験中より因果律を除去すれば経験が成り立たぬことから明らかである。さらにいえば、時間空間も感覚上の経験に由来するものでないことも明らかであるといわれる。

懷疑論者は因果、真理、心の成立を否定しているが、論ずるに當つて因果の規則に依拠している。しかし、真理が存せぬことを真理としているのは矛盾ではないか。また、唯物論者は物の外に心はなく、感覺を離れて精

神はないというが、そのように仮定することは心の作用であるから、それらは全て「心」によって論じているのであり、従って唯物論は唯心論の上に成立しているといわざるを得ないのである。

人間の知識思想の本源は「先天的精神作用」であるという主張に対して、進化論者は先天的精神作用は父母からの遺伝であり、本来の先天とは異なると云うだろうが、「外より入りきたりたる知識思想の材料に構造を与ふる原力」<sup>(5)</sup>は先天である。何故なら、太古の先人に遡るとしても、先天の本源は依然として先天として存するはずである。しかし進化論者は、人類の本源を動物界に認めるので、先天の原力は存しないと主張することから、進化の過程で獲得したものと結論している。人類の意識思想も進化の途中のことであり、無意識、無思想の動物から発達したというが、これも外界の経験より入りこんだという道理がなければ、下等動物あるいは生物の体内に胚胎していたといわなければならぬところである。このことを推し進めると、世界の太初にあつて星雲の未だ分化せぬとき、「生活、精神、意識、思想」は「内包の潜力」として存し、外界の経験に応じて「開發して顕力となつて現」<sup>(6)</sup>れるといわざるを得ない、と円了はいうのである。それによつて円了は、先天の本源は星雲の當時にあると断言するのである。

以上のように世界は「一大活動にして霊体」であるのに、唯物論者や進化論者はこれを「無精神、無活動の死物」と称しているという円了は、その故に唯物論者に反対するといふのである。それは円了が「至真、至善、至美の三相円満なる世界」を現立することを目的とするからだといふのである。それ故、世界を死物視し、生活を物力視し、精神を物質の支配下に置く唯物論は、結局、「国体の基本たる人倫道德」を破壊するに至ると

見ているからに他ならぬのである。

以上のような円了の議論は「俗論退治の破俗門」として位置づけられている。さらに唯物論は理論的に批判する「建正門」が立てられなければならないと円了はいうのであり、「建正門」を立てるに当つては、従来の「唯心論」は論理には富むが、実験の材料に乏しいので実験の材料を集め、内容を豊かにせねばならぬ、いうならば、実験や科学に裏づけられた「新唯心論」を提唱するのである。それは次のような順序で論述されるといふ。

第一に世界論(物質論)、第二に勢力論、第三に因果論、第四に大化論(以上は客観論)、第五に意識論、第六に理想論、第七に無限論(以上は主観論)、第八に應用論。

近代哲学はデカルト以来、思想を「哲学の出发点」としているが、唯物論を批判する円了は、唯物論者が真理と仮定する眼前の物質とそれによる世界を「哲学の出发点」としているので、「世界論」(物質論)を先ず最初に論ずるといふ。世界も物質も我々の知識思想の上に仮定したものであるから、先ず初めに知識思想がなければ物質の觀念も世界の知覚も唯物論そのものも存在しないといわざるを得ない。従つて物質や世界が既に存在するというならば「知識思想の实在を既定」することになる、といふのである。それ故、円了は、物質の既定に先立つて精神の既定を認めねばならぬのであり、従つて精神の方を第一の出发点、物質の方を第二の出发点と定める必要がある、といふのである。従つて唯物論者が物質を確實だと仮定することは論理に適わぬことである。しかも、知識思想を不確實だとすれば、それによつて認められる物質も、それを論ずる唯物論も不確實となるという矛盾を免れ得ない。従つて、唯物論は非論理的な仮定にすぎぬ、と

いのである。これに対して、思想を仮定するのも思想であるから、思想を第一原理とする唯心論は仮定説とすることはできない。円了は物質、世界を確実だと仮定することは非論理的であるとする「建正門」を示めすのである。

我々が生きる世界は、種々の物質が様々な変化を示めしているが、それはそれらの物質が分子や原子の「集合体」であり、分子や原子が相互に離散結合することによって変化を生じている。物質及び変化の本源は世界の太初である星雲時代にある。星雲の進化、開発によって恒星、惑星を生じたのであり、太陽も地球も同様にして生じたのである。地球は次第に冷却して現在の状況に至ったのであるが、その最初は太陽と同じく「火体」であったので、冷却した現在でも地球の内部には火気を含んでいる。地表の冷却に従って最下等の生物を生じ、それが分化して動植物となったのである。人類は動物から分化したものであるから、人間の本源は動物である。

円了はこのように宇宙進化説が説明することに賛同して立論するのだという。しかし進化のみを論ずる進化論には不満である。円了は更に一步を進めて、進化の極点に達すると退化が起るといふ仮説を述べるのである。退化が進行して滅尽の極に至った宇宙に、やがて再び星雲の状況がもどり、進化を辿って退化を見るところである。円了は進化論に対して「大化論」を立てるところである。人間社会も地球の進化退化の進行に依じて、退化を反復するというのが「大化論（あるいは循環論）」の骨子であるが、円了はこの構想を「仏教の世界観」（輪廻思想）から得たという。要するに、世界はひとたび進化し、ひとたび退化して「大化を完了」するのである。そのとき「大化」の前後を考えねばならぬが、現在の科学はそのこ

とを審びらかになし得ないが、推測することはできる、といっているのである。この推測は唯物論者にとっては空想にすぎぬと思われるかもしれないが、星雲状態から地球が出来あがり、火体としての地球に生命が誕生したといわれるとき、星雲状態の生成以前にその説明を求めねばならぬ、と円了はいうのである。

科学も哲学も現に認めているものは、第一に時間も空間も無限であること、第二に物質不滅、勢力恒存ということであるが、円了はこの二つによって大化の前後を推測し得るといふ。特に科学は、世界の太初は高勢の星雲に始まり、終極は各太陽系が全て衝突破壊する極であり、更に高熱を起す所以を、広く世間に知らしめている。それは空想でないといっているが、その論拠は推測である。しかし此処で円了は、物質よりも「勢力」に着目するのである。

これまでの長きにわたって回転通行して来た天体の運動は、その衝突によって「勢力」に変化したと考えれば、無量の運動から無量の熱を生じた、即ち、運動が熱に変じた、といつてよい。そうであるならば、世界の初めと終りとは同一の状態に帰し、熱より始まり熱に終るといつてよい。これを円了は自らの宇宙論の基礎をなすといっているのである。

世界の初めと終りが共に高熱であるということを経験して知ったことから、世界の終極は太初と同じく星雲になると推測し得ると円了はいうのである。更に、世界の終極が星雲になるといふ推測から、その星雲が滅熱して再び世界を開始すると推測することができる。しかも、物質不滅、勢力恒存の二規則からすれば、世界の終極において天体がどのように破壊されようとも、物質そのものは滅することなく、勢力恒存によって運動も

あり続けるが、不滅の物質が高熱を発するに至って太初の星雲の状態に帰するのである。その熱は発散、滅却して、今日のような天体を再び開立して「第二の世界」を結成するといわれる。この第二の世界に進化、退化が起つて「第二の大化」となつて、さらに「第三の世界」に至るのである。

無限の大化が進行し、無限に世界が続くということは、時間、空間の無限、物質不滅、勢力恒存の理法に照して、推測し得ると円了はいうのである。

世界の過去についても、円了は大化論によつて論じ得ると云う。世界の初めは星雲から生ずるとすれば、星雲以前に世界が存在しないとはいえない。物質不滅、勢力恒存を認める以上、星雲そのものを生じさせるものがないければならぬのである。

### 三

円了は、星雲以前に世界が存しないとはいへぬし、星雲の有する勢力の起源も存するはずだといふ。もしこのときに世界が初めて生じ、それ以前に世界が存在せぬといふとすれば、世界が無より生ずることとなり、例えばキリスト教の「ゴッド」のようなものを導入しなければ説明できぬし、「ゴッド」を導入したとすれば「ゴッド」の起源を説明しなければならぬことになる。それよりは、大化論による推測の方がより合理的であり確実だと円了はいうのである。すなわち、現在の世界は前世界大化の終極であり、前世界にも進化、退化があり、星雲が起こり星雲に終ることを知るならば、更にその前にも世界があり、大化が存することが推測できる。従つて、過去にも無限の世界、無限の大化が存することを知り得るのであり、無限の回数の大化を経て現在世界を開発したことを知り得るのだといふの

である。

時間の無限、物質不滅、勢力恒存の理法が真である以上、大化による推測を確信せざるを得ない、といふのである。唯物論者も俗論者もこの理法を確信し、「ゴッド」を認めぬ以上、この「大化論」を認めなければならぬのである。

空間について、世界の限界を考えるなら、宇宙には無数の太陽系があり、その中に各々の地球が存在するはずである。各々の太陽系の中の各々の地球は各々の大化のあり方によつて生物団の進化に差があるだろうし、終極に至つて太陽系が壊滅している場合や地球が壊滅している場合もあるだろう、といふのである。

唯物論者や俗論者は、一局部を見るだけで前後を考えず、中間を知つて両端を知ろうとしないので、唯物論者は、世界は縦横に無限である所以を究むるべきことを円了は求めるところである。

時間空間の無限において循環止まぬのが世界の大化であり、大化こそが円了の世界論の最も重要な基礎であり、勢力論の起点である。無限に反復する大化の原因は、物質にあるのか勢力にあるのか。

物質と勢力は相互に不離であるが、その両者に区別がある以上、同一体ではない。同一体でないとすれば、大化の原因を物質と見るか、勢力と見るか、を決定せねばならない。しかしこれに対して、進化と退化の反復、すなわち大化が勢力の発頭だとすれば、その原因は勢力だといえる。いふならば、世界の大化は勢力と運動の関係によつて起こり、初めの熱より運動が生起し、最後に運動の熱への変化、すなわち星雲に始まり星雲に終るというのである。これらは全て勢力の作用によるものであり、熱も運動も

勢力の発頭ということになる。物質はこの勢力の発頭によって発散しガステに変わり、あるいは凝集して液体、次いで固体となる、といわれる。すなわち、固体↓液体↓気体、と変化するのは熱という一種の勢力が加わることによって起こり、気体↓液体↓固体、と変化するのは熱力が減ずることによってである。各種の分子を集散分合するのも勢力である。世界の大化は勢力に依つてのことである。要するに、世界の大化は物質が勢力を左右するのではなく、勢力が物質を左右することによって起るといえる。換言すれば、物質は「所作用」となり、勢力は「能作用」となつて起るのである。無量無限の大勢力が物質にその作用を発頭することによって、その物質が万象に開らかせ、あるいは星雲となり、循環を反復し、無終の終まで大化を永続する、と円了は主張するのである。それはいうならば、物質は勢力が作用する材料にすぎず、物質は勢力の現象にすぎないということである。唯物論はその材料にすぎぬ物質を根本と考える誤りをおかしている、というのである。

世界大化の原因は勢力である、とする円了の主張は、次の主張によって補強される。すなわち、科学者は化学的元素を「最小不可析の物質」と云いながら、元素そのものが延長をもつか否かを明らかにしていない。もし延長がなければ物質ではなく勢力であり、延長があれば更に分析分割が可能である。そしてそのことによって得た「元素の元素」も延長を有することになり、さらに分析を続け、元素の元素を無限に究めて行けば、その終極は「延長なきもの」に終るより外はないことになる。それ故円了は、「無限的分析の極」は無延長性すなわち「勢力」に帰する、というのである。しかも、物質がその成立を保つのは全て勢力が存するからだ、という

のである。換言すると、勢力が存しなければ分子も元素も存在し得ないということになる。分子や元素の分合集散も全て勢力が存在することによって起こるといのである。元素の元素は無延長性のものの集合から成るのであれば、その集合も勢力から生ずるのであるから、全ての物質は勢力の集合あるいは関係にすぎないことになる。しかも宇宙の大勢力が活動するとき、進化退化を生ずるが、勢力の大中心の外に小中心を生じ、さらに活動するとき小中心の小中心が生じ、その極において最小の中心に至るのであるが、その中心が元素の元素となるのであり、円了はこれを「物質の大元」と名づけている。

さらに物質を感覚から考えると、所謂物質は五境（五感）に他ならず、五境は全て勢力から成るといえる。例えば音は物質分子の震動によるものであるが、その震動の原因は勢力である。すなわち感覚は勢力の衝突によってその形を成すものである。感覚によってそれを認めるとき物質を見るのである。換言すると、物質は勢力の現象なのである。勢力が物質の無限の体なのである。いうならば、物質は象であつて体ではないのである。すなわち、世界の大化によって明らかかなように、勢力の活動の如何によつて物質の状態を異にするのは、物質が生物の感覚の異なりに応じて一定せず、人間が物質と認めるところと、禽獣魚虫が認めるものと異なるのは明らかであり、このことからしても、物質は勢力の現象に他ならぬと円了はいうのである。

以上のことから、勢力そのものは絶対無限の体であるといわれる。それは無辺無限の大化をなすものの体も無辺無限、すなわち絶対となるからである。絶対無限であるなら平等唯一であり差別はないが、その活動によつ

て大化をなすとき、その表面は活動の相を示めすのである。その相を感覚の方から見れば、千差万別の物象、すなわち通常我々がいうところの物質を認めることになるというのである。現象である物質は相対差別を見ているのである。円了はこのような議論を「勢力一元論」あるいは「唯力一元論」と呼ぶのである。

現世界にあつて前世界と後世界のことを知る手がかりは、物質不滅、勢力恒存の理法であるが、因果永続の規則も三世界を貫くものであり、手がかりとなると円了はいう。

つまり、物質は勢力の現象であり、因果は勢力の規則であるといわれる。従つて世界の大化は勢力、物質、因果の三者の關係によつて行なわれるというのである。原因の原因を求めて無限に遡れば、その原因は世界の太初において定まつているといわれる。そうだとすれば、因果の永続は全ての変化を起す原理だといえる。しかも現世界は前世界の結果であるから、その原因は前世界であるといえるし、因果は勢力に固有の規則であるから、勢力の活動する限り、因果の規則も行なわれるはずであり、前世界に存しているといえる。この理を大化論に従つて無限の前世界に及ぼすとき、現在の結果を見て推測することが可能だといっているのである。

この因果律には、習慣性が付随するといわれる。因果律とは勢力活動より生ずる規則をいい、習慣性とはその性質だという。つまり、生物学でいう遺伝性にあたるというのである。習慣反復の理によつて、現世界は前世界の遺伝であることを知るならば、世界の進化退化の順序は前世界の順序を反復するものであることを推測し得るといっているのである。

円了は大化論によつて初めて、進化論者の仮定する遺伝の眞の起源も、

唯物論者のいう世界の本源も先天性の根元も説明し得る、というのである。

#### 四

円了は、生物進化論が単に生物界のみの説明に終つている点に不満をもつのであり、宇宙進化論も単に宇宙の変遷を進化の観点でのみ見て、進化の観点がないこと、また、宇宙・世界は死物的物質から分化したというに止まつているという点に不満をもっている。円了はそれらに代えるに「大化論」を以つてするといっているのである。

進化論が日本に紹介されて以来、進化論に寄せる関心は大きくなつていたが、外山正一が米国からスペンサーの社会進化論を持ち帰り、東京大学に紹介するに及んで、進化論に寄せる関心は更に高まつたのである。例えば、加藤弘之は初期の国家思想を述べた『真政大意』『国体新論』の二書を絶版に付し、新たに『人権新説』（明治十五年）を刊行したが、それは前二書 of 天賦人權主義を批判する基調を社会的進化主義に置いている。それは「物理ノ学科ニ係レル」進化主義だとしている。それはダーウインの名と結びつくもので「進化主義トハ蓋シ動植物カ生存競争ト自然淘汰ノ作用ニヨリ、漸ク進化スルニ随テ漸ク高等種類ヲ生スルノ理ヲ研究スルモノ」だとしている。また、加藤は「余は英国の開化史の大家バックルの著書を読んで所謂形而上学なるもの殆ど荒唐無稽なることを初めて知り、専ら自然科学に依拠せざれば、何事も論究する能わざるを感じて、それからダーキンの進化論、スペンサーやヘッケル其他の進化哲学の類を読むこととなつて、宇宙観、人生観が全く変化したため」、天賦人權説を「一撃ノ下ニ粉碎」するのだという（『加藤弘之自叙伝』）。ここでいわれるのは



自然科学的進化論、社会学的進化論であり、唯物論の立場を支えるものとなつてゐる。それ故、円了は『破唯物論』に於いて、加藤弘之を念頭に置いて批判するのである。

これに対して、三宅雪嶺は加藤とも円了とも異なる立場に立っているが、円了が大化論を説くのと似た思索を論じている。

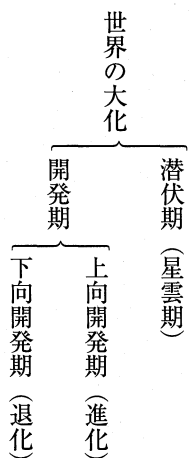
雪嶺の『我観小景』は哲学しつつある私の観察を論じたものである。哲学しつつある私は他の我と同じように、ここにこのように在る。私の周囲には家族、社会、さらには世界人類（地球）、宇宙万有がある。この我が宇宙万有に思想的に接するとき何らかの感想を持ち、彼私の消息を感じるとき、哲学するというのである。そして「所有万象、其の皆生あり、心霊あるを知るや」と問い、万象はいうならば生きた機関であり、それ自身の心意をもつて活動するものであつて、唯物論者が考えるように、宇宙は無機無生命の物件ではないといふのである。確かに雪嶺と円了とはその哲学の起点が異なり哲学観も異なる。しかし論ずるところは、人間の歴史だけではなく、「許大の地球」も同じであり、「生の前は意識を以て準ずべからず、生の後も意識を以て準ずべからず、意識を以て準ずべからざるは、觀念として死なり、乃ち生の前は死にして、生の後も死なり」といふ。円了の大化論の基本構想を思わせるものがある。さらに、「物質の本素は流動体の状にして、或る勢力の加わりたる者」として、円了と同じく勢力論をとつてゐる。すなわち、「勢力は皆な発出を主とす、而して或は部分の变化を為し、或は全部の变化を為す也。今夫れ或物が全く消失し、或物が形を異にして顕れ来るは常に観る所、而して宇宙の物体時ありて幾許か形体を変更するは亦疑ふべからざる所なり。……而も其勢力に至りては永久に

存在して、如何に微少なる勢力も亦無辺に波及するを争ふべからざる也。……斯の絶大なる宇宙も已に能く活動して心意を有す、其熱や電気や、皆発散して波及するのみならず、其思想に伴ふの勢力も亦必ず波及する所なくんばならず」といふのである。

さらに雪嶺は『宇宙』に於いて、宇宙を単なる物質的存在と見ずに、一つの活発な有機体、生命や精神生活すらもつ有機的大生物と見る「渾一観」を提示している。「哲学」は訳語であるが、「東洋哲学」「支那哲学」といふように東洋に存在して来た思想にも適用されているが、多少共通する意義が認められるが定義、範圍は第一に排除する所はない。科学との關係を見ても、第一に独断的で排除するもの、第二に独断を離れて連立を説くもの、第三に協合に傾くもの、がある。それらは、科学と異なつて哲学には不可思議が含まれるとするもの、哲学も準科学と称し得るところまで進歩しつつあるので科学の外に立つ必要はないとするもの、科学の理は各科に分かれるが哲学の理は全体に及ぶもので原理の科学といふべきものだと、哲学を捉えている。しかし、今日までの事実を見ると哲学が科学に貢献するところはないといつても可である。しかし人は万有の錯雑したままに放置できず「何等か一以て之を貫く」ことを欲する。これが「渾一」の觀念だと雪嶺はいうのである。關係の結果である宇宙の連絡を問うことは無際限であるが渾一の觀念は求め続ける。諸科学の統一ということも渾一の意味でなす外はないといふ。雪嶺はこの渾一の觀念によつて、先ず各国の国情を考察することから始め、可知的宇宙、有機体説の変遷、宇宙の力及び機関、宇宙の太初、天体、生物の發現、を論じて行く。そして水が気体、液体、固体と「循環的運動」をすることを取りあげる。この単純な運動が地球に、

宇宙に於いて大規模かつ複雑に行なわれるが、理は一であるという。この循環説に依つて人類の社会、意識、認識、科学、宗教、さらに進んで宇宙を知能、感能、意能との関わりにおいて論究している。宇宙万有についての論ずる視点は、雪嶺の「循環論」と円了の「大化論」「循環論」と称することもある) というように相に通ずるものがあるといえる。

円了は、自分の大化論の趣旨からすれば、進化というよりは「開発」の語が適當だろうという。すなわち、世界の大化はその初めを潜伏期あるいは内包期、大化の間を開発期あるいは外発期と呼び、開発期における進化の段階を上向開発期、退化の段階を下向開発期呼ぶのであり、潜伏期とは星雲期だということである。図示すると左の通りである。



## 五

潜伏期とは、前世界の結果を含有し、次の世界開発の原因を胚胎する時期である。草木に例えれば、種子は未だ発芽せぬとき、その中に枝葉花実を含有しているが、その相を示めていないときである。開発期とはその内包の原因を開顕するときである。この大化論と唯物論を比較すると次のような差異があるといわれる。

- (1) 進化論は現在世界の進化を論ずるが、大化論は前、後無限世界の進

化を論ずる。

- (2) 進化論は世界を死物視するが、大化論は世界を活物視して論ずる。

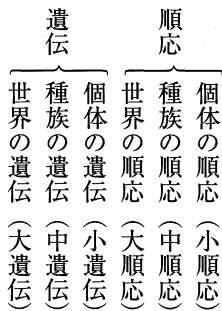
- (3) 進化論は物質の進化を論じ、大化論は勢力を論ずる。

- (4) 進化論は外面一様の進化を論じ、大化論は内容全体の進化を論ずる。

以上のような差異があるが、現世界の進化が前後無限世界の進化の標本であるから、世間に受け入れられている唯物論的進化(あるいは物質的進化論)を拡大して、前後世界に当てはめて、勢力の活動を論ずるなら、それは大化論と同じものになる。

進化には、(1)地球の進化(小進化)、(2)天体の進化(中進化)、(3)宇宙の進化の段階がある。地球の進化の理を知らば宇宙の進化を類推し得るといわれる。

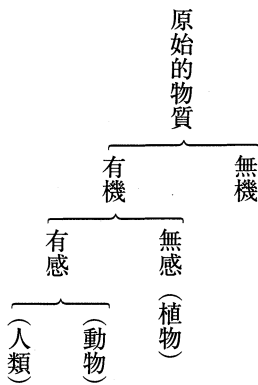
地球の進化は、無機進化、生物進化、人類進化と分かれて進行するが、最も近い人類進化を標本として、宇宙進化の理を考えることができ、生物及び人類の進化を「順応」「遺伝」の視点で考えるのである。



個体の順応とは生物の各個体が一生涯の間に外界の変化に順応することであり、種族の順応とは生物全体の突世累代の順応をいい、世界の順応とは世界の開発期間の順応のことである。

また、個体の遺伝とは各個体が父母の形状性質の遺伝のことであり、種族の遺伝とは生物あるいは動物人類一般に通ずる形状性質の遺伝、世界の遺伝とは前世界の開発期間の状態の遺伝をいうのである。そしてこの世界の順応、遺伝を述べるのは大化論のみだという。進化論の根本原理を究明するには、前世界にまでさかのぼらねばならぬのであるが、進化論はそれを行わぬので、その本源を未知に托するだけで一切の原理を仮定に止めている、と円了はいうのである。

唯物的進化論者は進化を考えると、一般に、最初は無機物質のみがあり、これより有機物が分化すると考えているが、円了はこれを誤りだとし、最初の物質は表面上は無機であるが、そこから有機物が分化するといふ以上、すでに有機物を含んでいるといわざるを得ないのだから、裏面から、円了は最初の物質を「原始的物質あるいは原質」(六二八頁)と名づけるのである。つまり、それは、その中に生活も精神も含有している活動体、内包的活動だといふのである。原始的物質の分化開発順序は次のように示めされる。



この原始的物質は星雲より来生したものであるから、星雲そのものも原始的物質である。それ故、原始的物質はその中に前世界の状態を具備し、前世界の生物人類も生活精神も全てが潜伏している本来の活動である。その内包しているものを外発するのが進化、すなわち、前世界に存したものを現世界に開発するのが進化である。前世界においても原始的物質が分化開発するので、これによって前後無数の世界のことも全て推測し得るといわれる。しかも円了は、世界の大化は大進化を実行しつつある、と考えている。すなわち、大化が無限に向って反復窮まりないのであるから、世界全体の趨勢が無限的進化を目的としているといわざるを得ないからである。

## 六

円了の『破唯物論』による唯物論批判に対して、加藤弘之は『破唯物論』<sup>(10)</sup>によって、この大化論を含めて円了の所説に反論を加えている。

それは、円了とは親子ほどにも年令が離れており、長年交誼深厚であったにもかかわらず、「余の学説を駁するもの多」しと思ひながらの反論であった。

- (1) 円了がその緒論で「近來、西洋より唯物論と名くるイト腥き風が吾が学問社会に吹き込み、追々之に靡く徒もありて、神州の清潔も之が為に穢されたとする有様となりました」と述べていることに対して、加藤は生意氣書生が物教奇半分に離し立てたものと無視していたが、雷同唱和する者も多くなり、多くの人がまきこまれ始まったので傍觀座視できなくなつたと、かなり感情的となつての反論であつた。

- (2) 「唯物論の流行と共に、我が従来の神儒仏三道が立つか、忠孝人倫

の大道が依然として存するか」に対して、円了の論理は全編にわたって非科学的なものが多いが、唯物論が三道を破壊しつつに国体にも及ぶというのは特に甚しい。円了は三道が東洋に固有のもので、我国にも不可欠の至善至美のものだから之に違う者は排斥されねばならぬという。三道の性質を論じていない。儒仏は東洋古代の哲理と見なし得るが、神道は宗教、神話と見るべきもので哲理とは見なされない。このような見解を以って唯物論と対比して得失利害を論ずべき理由などあるはずはない。神道や国体を妨害し攪乱するものがあるとすれば、諸科学こそそうであって唯物論ではない。一種の哲理を有する儒仏二道が真理に反することがあれば、唯物論がこれを論難するに不思議はないはずだし、二道が真理に合致せぬものが存するなら、これを保存する理はないだろう。唯物論に真理と合致することがあればこれを取るべきであることはいうまでもない。

(3) 「苟くも三道の敵と認めたものは、皆之を一束に纏めて茲に唯物論の張札を付けた」「其の中に唯物論、進化論、実験論、感覺論、自利論等が一括され」、「更に拝金宗、体欲宗、御幣連、芋虫論も加える」という円了の唯物論の捉え方に対して、弘之は唯物論と同一視できぬものを含めるようなことは、余りにも非科学的態度であり、しかも福沢諭吉と加藤弘之を唯物論の「首魁」と評することは不当であり、兩者を一括して論ずることも不適である。

(4) 国民に自由、独立の精神を發揮せしめたのは唯心論であり、靈魂不死説を説き、先天性の道徳を立てたのは唯心論だとする円了に対して、唯心論は人々の精神を剛壮にし、唯物論は精神を柔惰にするなどとい

うことは、唯物論と唯心論の何れが真理に合するかを論ずるものでなく学者の議論とするに足らぬという。拝金宗、体欲宗が悪しき結果をもたらすか否かは「唯物弁護者たる余の毫も関係せざる事」だからその是非を語る必要はないという。何れにしても加藤弘之は、証拠を示めさぬ円了の論旨を非科学的だと非難するのである。

(5) 「進化論は、……生物学若くは有形学の範圍に止めずして哲学上遍及し、心理も社会も、道徳も宗教も皆進化の一本槍を以て取扱はる、に至りたるは余輩の賛成せざる所」というのに対して、これも非科学的論旨だと云うと共に、唯物論も進化論も現象以上に遡って臆測の論を行なうことを断乎否定し、ただ現象の内に正確真実の論拠を求めるものである。円了はまた、仏教の所謂因果によって主張しているが、仏教の因果も現象以内に止まるもので、現象以上に遡って研究するものではない。にも拘らず仏教の因果を無上の真理というのは矛盾だという。

(6) 「進化論は、……世界の表面上の觀察に過ぎずして、其実体迄も究めたるものとは申し難い。……果して然らば、進化論を以て世界の原理とし、哲学の根本とすることではありませぬ」というのに対して、進化論者は決して進化を以て世界の哲理とするものではないし、進化をただ世界現象上の「天則」(自然法則のこと)とするのであるから、円了の論難は不当だといふのである。

(7) 円了は大化論において地球、天体、宇宙の各々の進化を説き、所謂星雲から地球、天体の進化する所以を論じ、かつこの進化は更に退化となり、更に進化、退化が相互に変遷交代して未来永劫にわたって止

むときのない理を説き、星雲中には物質が存するだけでなく、生活、精神が潜在し、星雲の進化に従つてこの生活、精神が併発する、ということを通じて。これに対して加藤弘之は、天体の進化、退化を説く大化論は仏教で説く「成住壞空」と同様のもので円了の得意とするところであろうが、星雲中に生活、精神が潜在しているということについては、満足させるものではない。結局、臆測されたものでしかない。円了が批判する唯物論者と異なるところがないので、円了に返上するしかないというのである。

(8) 「俗論派が進化論の優勝劣則、適者生存の規則に本き、自利説を立て利他説を排し、後天論を取て先天論を斥し、以て神儒仏三道の所立に反対する点を痛論して大に其非を天下に鳴らす積り」だということに對して、加藤弘之は、社会結成前にも道德は天地自然に存するという直覚派と、道德は社会の安寧幸福のためにのみ存するという功利学派との対立について円了は直覚派に属し加藤は功利学派に属するのだから、今さら議論をしても円了は功利学派を認めることはないであろう。しかし、社会結成以前の動物界には道德はなく、社会結成後の人類に道德が萌芽し発達したというべきであり、どのように考えても道德は社会の安寧幸福を進めるために次第に進歩したもので、自利を口にするのもその過程においてのことである。円了が「社会結成以前に道德なし、最初は自利のみありて、利他なし」というのは妄論だというのは誤りだといふのである。

さらに円了が動物には利他心が外発も開発もしないことから、「自利心中、已に利他心を胚胎する」ということに対して、加藤弘之は、ある物に

胚胎するものは必ず同一性質をもたねばならない。人の腹中には人が胚胎するといふ。自利心と利他心は異質であるのに円了は、自利心の内に利他心が胚胎している、といふ。円了はこのような異質の胚胎が存することの理由を示めしていない、と加藤弘之は批判するのである。

加藤弘之は皮肉をこめて、円了の説は「前後自家撞着」するものだというのである。しかし加藤がどのように大化論を批判しようとも、大化論の骨子には現代の宇宙論に通ずるものがある。宇宙は一つ (universe) ではなくて、多重 (multiverse) であるということが常識となつてゐる。宇宙の初期には急速な膨張があり、円了のいう「火体」の状態から天体や銀河 (円了のいう「星雲期」) が生まれたといわれる。この宇宙の始まりであるビッグバン (円了の「勢力論」) によつて宇宙が生まれ、この宇宙にビッグバンが起つて宇宙から更に宇宙が生まれ、その宇宙にビッグバンが起つて更に宇宙が生まれ、という宇宙の多重発生を見るのである。これは円了の「前界・現界・後界」理論に充当するといえる。これに円了の「宇宙の遺伝説」をあてはめることも可能であろう。

円了の大化論は、世界全体の趨勢が無限に進化するということを前提している。この前提によつて、世界の内面すなわち大勢力の裏面である主観の面を考えねばならぬのであり、大化論は精神、特に意識、を論究するものとされるのである。

そもそも「原始的物質」には全てが潜伏しているのであるから、意識も潜伏しているといわざる得ない。この意識潜伏の状態の開発を円了は、外面は無機物であり、内面は生活、感覚、思想であるところに向かうとしてゐる。無機物は勢力が外面に現れる現象であり、その体も勢力である。円

了はこの勢力論を内面にも適用して、各々を生活力、感覚力、思想力と呼んでいる。この思想と感覚とは意識の部分であり、その中心は理想又は理性と呼ばれる体である。いうならば無限性の思想である。勢力の中心に存するその体に固有の無限性を継続しており、その他の思想は有限であり悟性である。悟性は物質性を利用して進化の目的を達するのである。円了は感覚を覚性と呼んでいる。

理性は無限性であり、常に無限の進化を大成するもので、物質性（無機力または感覚力）に対立するものであり、自由の思想の本源である。これに対して無機力は有限性を保持する退勢力の習慣性をとるので、不自由性すなわち必然性の根拠である。必然性の無機力、有限性の感覚力は、自由性の理性力と対立するといわれる。理性は意識の一部分といわれる。

意識と無意識の関係について円了は、無意識は盲目的、機械的な作用を意味し、生活と無機力が無限の進化を妨げる因果の習慣性のみ支配される、というのである。意識は精神作用であり、感覚、悟性、理性を総称するものであり、無限の進化を助けるものである。唯物論者は人間の身体が物質から成るといふが、理性の出現、活動についての説明は十分でない。それは大化論でいうような、前後の世界が存在し得るといふことを知らず、また、星雲の内に潜伏していたものが次の世界の大化の進行中に開発することも知らないからだといわれる。

円了によると、唯物論は勢力活動の表面を見るだけであり、唯心論は裏面を見るだけで両者は共に偏見にすぎぬが、両者相対立するときは唯心論をとると円了はいふ。それは自説の勢力には本来延長はなく、意識性のみあって物質とは異なり、唯心論の原理に近いからだといふのである。

円了の真の狙いは神儒仏三道の復興にあり、従って『破唯物論』が唯物論を批判するというが、その意図は勿論三道復興にある。三道の従来の欠点は、西洋実験学に類することを欠いていること、国際競争に進取の方針をとらなかつたこと、の二点にある。従つてこの二点を是正し方針を一変すれば三道も勝るものとなると円了はいふ。しかし、唯物論や功利主義を取るならば道徳が壊滅することになるとの思いが強い。それ故、道徳の強化が必要であり、内に向かつては一身の道徳を円満にし、外に対しては国家の理想を充実させることを不可欠としている。このことを実現することが自分の人生の目的だと円了はいふのである。そのためには、通俗的唯物論を論破する必要があるといふのである。円了の意図は三道によつて先天の学説を立て、日本に固有の道徳の確立にあつたのである。

## 註

- (1) 『破唯物論』井上円了選集第七卷、六〇二頁
- (2) 両書とも「井上円了選集第一卷」所収
- (3) 『破唯物論』五九二頁
- (4) 同五九五頁
- (5) 同六〇〇頁
- (6) 同六〇一頁
- (7) 三宅雪嶺『我観小景』政教社 明治二十五年、『明治文学全集33』筑摩書房所収。二五五頁
- (8) 同前二六六頁
- (9) 『宇宙』政教社、明治四十二年、『三宅雪嶺集』「明治文学全集33」所収。
- (10) 加藤弘之『破「破唯物論」』加藤弘之講演全集第三冊「丸善株式会社、明治三十三年、『加藤弘之文書第三卷』」所収。